

---

# 仕切りの向こう

秋名

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕切りの向こう

### 【Zコード】

Z6016B

### 【作者名】

秋名

### 【あらすじ】

主人公の男は大学の友達多数と共に飲み会のため深夜遅くまで営業している居酒屋に来ていた。

あれは飲み会の時だつた。

最初のうちは男は男で盛り上がり、女は女で盛り上がっていた。途中から酔いが回り始めたのか、だんだんと男女がごちゃ混ぜになつてきた。

「ねえ？あのさ～あたしの彼氏ってさあ・・・」

「いやあ～あの時は俺は参ったね！だつてさあ・・・」

「はあ～前にね・・・」

などと各自がグループを作つて話している。

一人で席を立ち、トイレに向かうフリをしてその場を一時的に離れた。  
俺は仕切りで分けられた隣の席に移つた。

遅くまで営業している居酒屋で、終電の時間も過ぎていたために、店内には俺達と、もう2組しかいなかつた。

「なにが楽しいんだろうなあ・・・

一人になるとやたらと余計なことまで考えてしまつ。

「ん？何してるの？」

そこには、今日一緒に来たメンバーのうちの一人で、俺が「

「彼女なんか・・・」と思い始める前に好きだった子だつた。  
もう好きとかそういう感情はあまりなかつた。

靴を脱ぐ場所に座りながら、からだだけをこっちに向いていた。

「何つて・・・むいりに脚づらかつたからこちへ来たんだよ

「え～～！ウチと一緒にじゃ～ん！」

「えつ？」

「なんか知らない人の話とか聞いててもつまんないじゃん

「お、俺もそうだつたんだよーお前と氣が合つなんて思つてなかつたよ」

「なにそれ～！酷くな～い！？」

隣に座つた彼女は、少し酔いが回つていて、頬も少し赤かつた。  
化粧のせいかもしれないけど・・・

「う～ん」

彼女はグラスを両手でガツチリと押さえながらつなつていた。

「ん？ なした？」

自分のグラスを口に近づけたときに聞かれた。

「あのね～なんか彼氏が出来ないんだよね～

「え？ お前つて彼氏いたんじゃないのか？」

「え～？アハハ。いるわけないじゃん！もしかしていると思つてたの？」

「う、うん。だつてそれなりにカワイイから彼氏の一人や二人ぐら  
い……」

「マジかあ～！ウチつてそんな風に見られてたんだあ～

「ずっとこむと思つてたよ」

「アハハハハ！お、うわあ……」

彼女は座つたままバランスを崩して後ろに倒れそうになつた。  
壁に頭をぶつけそうになつた彼女を支えようとした。

彼女の首の後ろに手を回して、壁と頭の間に自分の手を滑り込ませ  
た。

「ゴンッ

「いてっ

「あ・・・大丈夫？」

支えようとしたけど力が入らなくて、彼女の上になつて顔を覗き込  
むような体勢になつた。

「・・・

「・・・

少しの間、目が合つたまま沈黙の時が流れた。

俺は彼女が何を考えているのかを考えていた。

彼女の少し酔いが回つてトローンとした目。

彼女の少し赤くなつた頬。

彼女の髪の毛。

彼女のまづげ。

彼女の少しだけ見えるかわいらしい八重歯。

見れば見るほどかわいく見えてしまつた。

「えーと・・・」

「あ、ごめん!」

慌ててびくよ!とした俺の手を彼女がつかんだ。

「び、びくりたんだよ」

「うーん・・・なんていうんだろう?」

「こんな体勢だつたら襲つちまつせ?」

「いいよ

「え?」

〔冗談で言つたつもりだったのに・・・

「別にいいんだけどなあ・・・」

「冗談はよせよ」

「おいおい、何言つてるんだよ。なんだ？俺に氣があるのか？」

「あるね～」

彼女はニカーツと笑つた。

「ホントにか！？」

思わず叫んでしまつた。

「ホントだよ～」

「えつ！え、えーと・・・」

とりあえず元の座つてた時の姿勢に戻つた。

彼女も隣に座りなおした。

グラスに残つていたスクリュードライバーの残りを飲んでいた。

「ホントに？」

確認のためにもう一度聞き返した。

「ホントだよ」

落ち着いた声で彼女は言つた。

「えーと・・・」

俺の頭の中はパニック状態だつた。

とりあえずなんて言つたらいいのかわからない。  
えーとえーと・・・

「お、俺も結構気にしてたんだ。お前のこと」

「え？ なんて言ったの？」

「2回も言わすなよ！」

「フフフ。うれしいよ。ウチも好き」

「俺もお前が好きだ」

2人は後ろの仕切りの向こうで一緒に来たメンバーが騒いでいることになんて気にも留めないで、キスをした。

（Fin）

(後書き)

一応これでおしまいです。  
こんな恋ができたら嬉しいと思つて書きました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6016b/>

---

仕切りの向こう

2010年10月14日22時20分発行